

も うメンタルが落ちません。と、高尾小学校のK 教諭が電話口で笑わせる。というのも、子ども 落語が博報賞を受賞したのに続いて、もう一つ某大企業 の財団が主催する教育賞の選考にかかっているのだ そうだ。その連絡が入る前日には、博報賞のお祝いを 兼ねた東京公演が決まった。その経緯にも心揺さぶる 出会いや多くの厚意が重なり合っていて、K教諭の先 の言葉もまんざら冗談ばかりではなさそうだ。選考の 結果がどうあれ、高尾の子どもたちと職員、保護者や 地域の人たちの十年のじたばたが様々な人たちの心にと まり、新たな広がりを作り出している。

先週書いたとおり、ぼくが高尾小学校にいたのは、 四年間だった。最後の年は今思い返しても笑ってしま う。何せ残留した職員はぼく一人で、ほか四名、校長、教員、校務技師すべて異動だったのだ。離任式、着任式は一人何役もせねばならず、校歌の伴奏こそCD に任せたものの式場を一人パタパタした。大真面目に やったが、端から見ればどうしたってドタバタ喜劇だ。幸い子どもたちはそのおかしさに気づかず、最後まで真剣な面持ちでいてくれた。こんなことがまかり 通り、どうにかなくなってしまっても極小規模だからこそ だ。職員総入れ替え、それがどうした、と泰然として いてもよかったのだが、気心の知れた仲間たちには

「あり得んだろう、ふつう」と毒づき、同情を買いに 走った。他校の教員たちはおしなべて「大変だなあ」 などとこちらの意図を酌んでくれるのだが、どこか半 笑いで、要するに他人事なのだ。

まあこんな異動は、煮るなど焼くなど好きにせやと 言ってるようなものだ。で、実際そうだった。赴任し てきたK教諭がおもしろがって全校落語を打ち出した のだ。それまでは、ぼくが担任している中学年のクラ スだけでやっていたのだが、あちこち呼ばれてご馳走 やお菓子にありついているのを他のクラスの子どもたち もK教諭も黙って見過ごせなかったらしい。一年生 から六年生まで全校で落語をすることになって、一気 に活気づいた。新しい箱ができて、そこに何を入れる か考えるというたいそうおもしろい一年間だった。

一人で送り出した離任式から一年後、ぼくは一人で 送り出された。その後も全校落語はK教諭を中心に福祉 や防災防犯も取り入れてどんどんユニークになって いった。偶然ある温泉施設で子どもたちの落語を見た 大学教員の研究対象になり、それが縁で三年前には東京 公演を行った。来る十二月十七日は、二度目の東京 だ。どこにどうつながっていくのかわからないもの よ、と思う。「意外」と「おもしろい」は、けつこう 近いところにあるらしい。



専門ババ奮闘記 (その2) 119

木幡智恵美

秋 (8)

息子の二度目のワクチン接種が終わった。今回も夕刻から微熱が出たため、夕食後すぐ「寝るわ」と言って二階へ上がった。幸い翌朝は平熱に戻り、仕事に向かった。この ところ、県内の新型コロナ感染者はゼロが続いている。

長男の誕生日が近づいたのでちよつとしたプレゼントを送り、誕生日当日にはメールを した。返事が来たのは翌日で、一か月後に帰省する予定だとある。この前帰って来たのは、二年前のお盆だ。蒜山で車のエンジンが停止し、JAFに頼んで夜中に車ごと引き 返してきたことが蘇る。新型コロナの感染が広がり、義母の葬儀にも帰れなかつ た。正月に帰るとすれば、約二年半ぶりだ。その時に、また感染者が増えていなければ よいが。

長男からの返信があった日、玉湯に行った。十一月も下旬、晩秋というより、冬の気配 だ。娘が実歩と買い物に行っている間、男の子二人と留守番。二階に上がっておもちゃ で遊んだり、下りてお絵描きしたり。家の中に飽きたのか、宗矢が外へ出ようと引つ張る ので、ジャンパーを着せて出た。けれども、空気が冷たく、風邪をひかせるといけないの で、早々に家に引き返した。このところ、宗矢の言葉が増え、「何食べちよう」と聞くと、「ぼん」と答える。「うえ」も覚え、二階に行きたい時は「うえ」と言う。我が家へ来ると、よく二階へCDを聞きに行くのだが、家に帰るとお父さんに、「ぼば、うえ(ババの家で二階に上がった)」と伝えたそうだ。最近では「おつつあん」も覚え、「おつつ あん、おつつあん」と連呼している。そのくせ、実際のおつつあんにはあまり近づかない のだが。寛大は近頃、色塗りにはまり、飛行機などを描いてくれとせがんでは色を塗って いる。娘が実歩との買い物から帰り、皆で昼食。宗矢を寝かせると、実歩は待ってました とばかりに「トランプしよう」と言った。帰る時刻になったので玄関を開けると、寒い のなんの。その日の最高気温は十、六度だった。

数日後、雷鳴が目が覚めた。雪起こしか。まだ布団の中に居たいけど、朝からお昼の準備 をしなくてはならない。大根の煮物は昨日作っておいた。あとは、炊き込みご飯、白菜 サラダ、しじみ汁、それに、クレープの仕上げ。今日は、孫たちがやってくる日なのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。ロシアがウクライナとの戦争で核を使うのではないか、中国が台湾の武力統一に踏み切るのではないか、というのが世界の安全保障上の2大懸念になっている。

年金生活者 プーチンが核を使うとすれば、使う可能性が薄れたとの観測が広がったときかもしれない。ウクライナに攻め入ったときも、「侵攻はしないのではないか」という見方が広がっていた。「逆張り」の効果を狙うのがプーチンのやり方だ。

30代 その「逆張り」に失敗して、いまウクライナ軍の反転攻勢にさらされている。

年金 「逆張り」が思い通りの成果をあげられなかったのは、攻撃が手ぬるかったからで、核なら容赦のない打撃を与えることができる。プーチンはそう考える可能性が高い。人間は何かに失敗すると、やり方が悪かったからだと考え、今度こそうまくやろうと、同じことを繰り返す。

メンツが立つような緻密な外交を展開していたら、侵略を踏みとどまらせることができたかもしれない。それをしなかったのは東西冷戦の敗者に対するあなどりがあつたからと推察される。

30代 侵攻開始の少し前からアメリカは侵攻必至の情報を発信していた。

年金 「あなどり」はふた通り想定される。ひとつは、ロシアはそんなに機嫌を取らなくても、代償の大きい侵略には踏み切れないだろうという油断であり、もうひとつは、侵略に踏み切れればロシアを弱らせるチャンスとなるかもしれないという思惑だ。

中国に対してはそんな「あなどり」をアメリカは持つことができないはずだ。侵略にともなう大きな代償を負担する力は中国のほうがロシアよりはるかに大きい。台湾に侵攻した中国に武力を行使したとしても、中国はアメリカが安心できるほど衰退することはあり得ないし、アメリカ自身が体力を消耗する。

おそらくアメリカは中国のメンツを

プーチンのウクライナ侵略を「逆張り」と呼んだのは、世界の戦争の「本流」が東西冷戦以降、破壊を競い合う「熱い戦争」「流血の戦争」から、抑止力を競い合う「冷たい戦争」「無血の戦争」に移ったからだ。それがあから、世界中がロシアの侵攻に衝撃を受けた。予想を覆しての電撃的な作戦に、首都陥落、全土制圧は時間の問題のような見方がなされた。

30代 勝手な「逆張り」のせいで、世界の戦争の「本流」は「流血の戦争」に逆戻りしてしまったように見える。

年金 ウクライナがロシアを押し返すことができたのは、結束した国民を西側諸国が大量の武器の援助と大規模な経済制裁であと押しし続けているから。それはこの戦争が西側諸国にとっては依然として「冷たい戦争」「無血の戦争」であり続けていることを意味する。蓄積された「抑止力」が武器援助を可能にし、リアルな武器と化した「経済力」が制裁を可能にしている。世界の戦争の「本流」は元には戻って

つぶさないように振る舞うと同時に、自らも向こうにあなどられないようにする緻密な駆け引きを水面下で展開しているはずだ。それが中国の台湾侵攻の強いブレーキになっていると考えることができる。

30代 核使用や台湾有事が避けられたとしても、世界を覆う物価高、インフレは止まらない。

年金 ロシアのウクライナ侵略が加速

いない。

30代 先日の朝日新聞は朝刊1面に「台湾有事 直面する懸念」の見出しを、続く2面には「台湾も尖閣も 二正面の防衛シナリオ」の見出しをそれぞれ掲げ、「安保の行方」と題した特集を組んでいた(10月16日)。

年金 いま日米両国は中国を相手に「抑止力」と「経済力」と「情報力」を競い合う「無血の戦争」のさなかにあり、こういう報道自体が、朝日新聞の意図とは別に、対中国の情報戦の一環をなしていることを押さえておく必要がある。

ロシアのウクライナ侵略によって、中国による台湾の武力統一の可能性が高まったとの指摘がしきりになされた。しかし、台湾をウクライナになぞらえるのは危うい。ロシアの侵略を許したのは、アメリカがロシアを中国ほど重視してこなかったことが大きな要因のひとつと考えられるからだ。

もしアメリカがウクライナのNATO加盟問題などをめぐって、ロシアの

するインフレは戦争が終われば取まるわけではない。長期化するアメリカと中国との「無血の戦争」がインフレを常態化する。

長谷川慶太郎は、戦争がインフレを引き起こし、平和がデフレを導くと指摘し、東西冷戦のあいだインフレが常態化していた世界経済は冷戦の終結とともにデフレ基調に転じた、と断じた。

戦争がインフレを引き起こすのは、国家が武器をそろえたりするために財政支出をして需要を喚起するからだ。デフレになると、企業は需要の喚起を国家に頼れなくなり、自らそれを創出するために絶え間ないイノベーションを続けなければならない。長谷川はデフレを「売り手に地獄、買い手に極楽」という言葉で言い表した。

それが今は「売り手に極楽、買い手に地獄」へと逆転した。極楽を享受する企業はイノベーションの努力をしなくなり、富は増えなくなる。買い手は物価高地獄の入り口に立たされた。

ニュース日記 851
中村 礼治

終わらない戦争と 進行するインフレ